

ごあいさつ

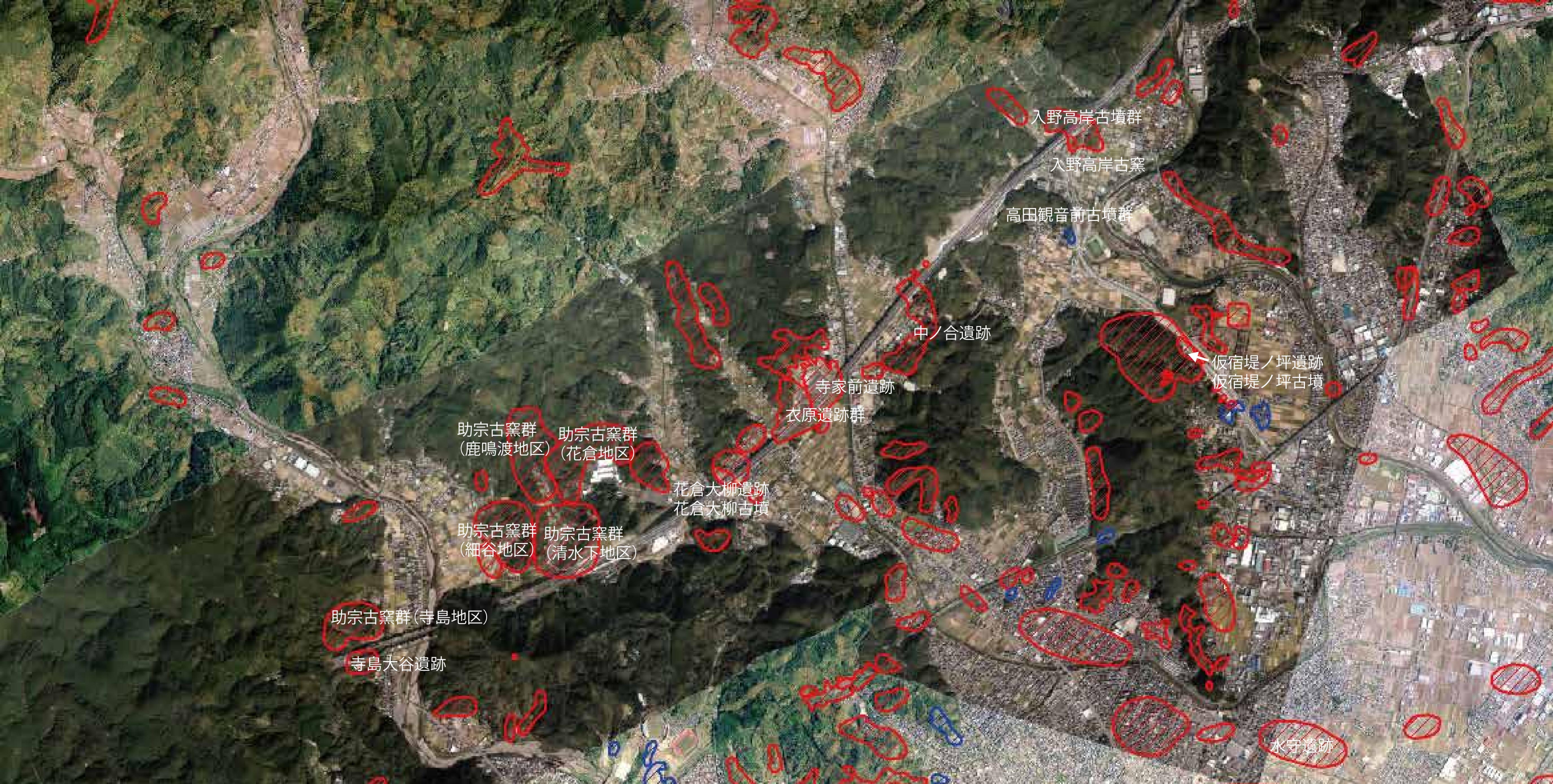
「発掘された静岡～藤枝里帰り展～」をここに開催します。地中に眠っている遺跡は、発掘調査によって見つかる建物跡や出土品などから、さまざまな地域の歴史を明らかにしてくれます。

新東名高速道路の建設に関わる発掘調査では、古墳や土器を焼いた窯跡、集落跡などこれまで知られていなかった数々の遺跡が発見されました。発掘調査により出土した資料は、静岡県埋蔵文化財センターで収蔵されており、市内で展示する機会がないことから、このたび里帰り展として地域ゆかりの出土品を一堂に公開します。

あわせて、助宗古窯群など市内及び県内の発掘調査の成果から、近年注目されたものや、出土品の中から厳選した逸品を特別公開します。

令和8年1月

静岡県埋蔵文化財センター 所長
藤枝市郷土博物館 館長



展示関連遺跡位置図

1 志太地域と焼き物

窯を用いた焼き物の国内生産は古墳時代中期（5世紀初頭ごろ）に始まります。須恵器と呼ばれる焼き物で、轆轤の技術とともに朝鮮半島から伝わったと考えられています。志太地域では、古墳時代後期から窯業生産が始まり、その後、平安時代には灰釉陶器、平安時代末～鎌倉時代～室町時代には、山茶碗などが生産されています。

新東名建設に先立つ発掘調査によって、藤枝市内で初めて古墳時代の須恵器窯（3基）が発見されました。衣原1号窯は、6世紀後半に操業を開始した駿河地域最古の窯、入野高岸1・2号窯は、7世紀前半に操業した窯です。

その後、藤枝市内では助宗古窯群で奈良～平安時代に須恵器、灰釉陶器、山茶碗を生産した窯が100基以上確認されており、焼き物の一大生産地であったことが分かっています。助宗古窯群の焼き物は、駿河国を中心に供給されています。また、その一部は遠く都まで運ばれていたことが発掘調査により知られており、当時の税として納めた鰯の加工品を入れた容器だったとする説があります。

藤枝市内の窯業は、鎌倉時代以降に衰退したようで、駿河の窯業の中心は、島田市域に移っていきます。

窯登場以前の焼き物

窯が登場する以前の縄文～弥生時代の焼き物は、野焼きと呼ばれる焚火に近い状態で焼く方法が採られていました。一般的に縄文土器は焼く温度が低く、弥生土器は高いと言われますが、弥生土器の一部は、覆い焼きと呼ぶ土器を藁や粘土で覆って焼く焼成方法によるものと考えられます。

また、轆轤を使わず木の葉や木の皮などを編んだ網代編みの上で回しながら製作していたと考えられます。

寺家前遺跡（藤枝パーキング上り付近）では、弥生時代の集落が発見され、弥生土器がたくさん出土しています。

貯蔵用の壺、煮炊き用の甕が主な構成となっており、壺は表面に様々な模様を施すことが特徴です。

なお、弥生土器の流れを汲んだ古墳時代以降の土器は土師器と呼ばれ、窯の登場後も作り続けられます。縄文土器、弥生土器に比べ模様で飾られることは少ない焼き物で、中世のかわらけなどの土師質土器に取って代わられるまで生産が続きます。

縄文土器の焼成方法（野焼き）



1. 薪の上に土器を密着させて置く



2. 全体を薪で覆う



3. 枯れ葉をかぶせる



4. 枯れ葉に点火



5. 燃焼中の状態



6. 全部が燃えになり温度が上がる



7. 焼成終了



遮るものがないため、熱は四方に拡散する

弥生土器の焼成方法（覆い焼き）



1. 薪の上に土器を密着させて置く



2. 藂をかぶせる



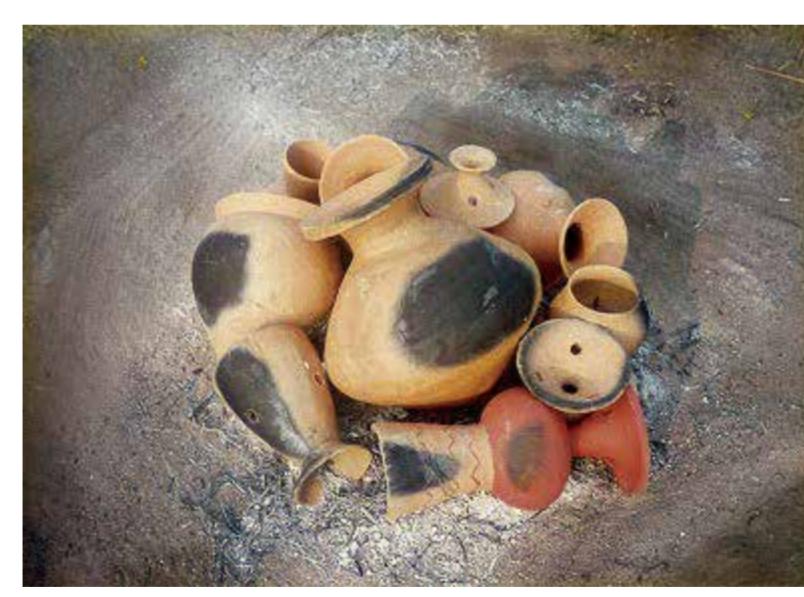
3. 上部を泥で覆い、裾の藁に点火



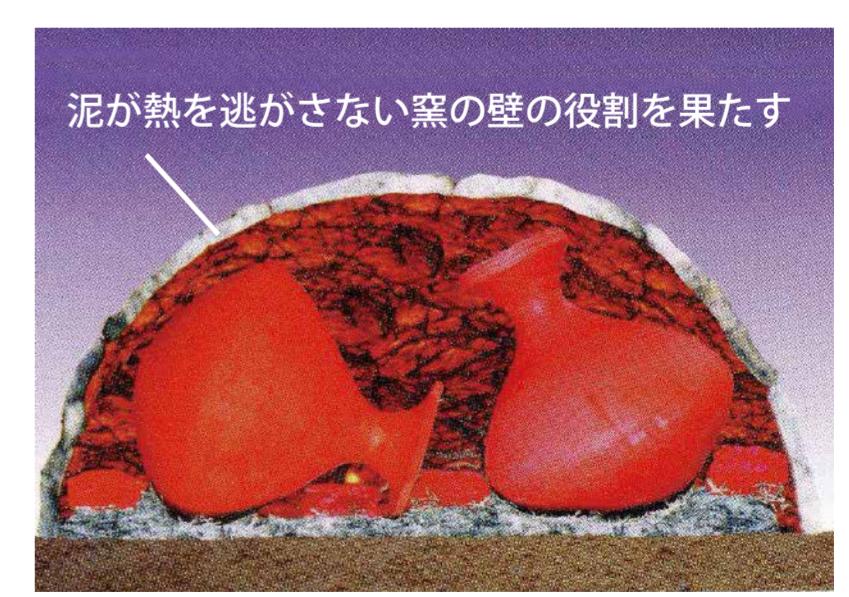
5. 焼成終了



6. 上部の泥を除去した状況



7. 泥との接触面にできた黒斑



内部の燃焼の様子

須恵器窯の登場

新東名建設に先立つ発掘調査によって、藤枝市内で初めて古墳時代の須恵器窯（3基）が発見されました。

衣原古窯群（藤枝パーキング上り付近）

6世紀後半の須恵器窯1基が発見されました（衣原1号窯）。駿河で最古の事例です。焼かれた器種が豊富なことが大きな特徴です。

いりのたかぎし 入野高岸古窯（藤枝岡部IC付近）

7世紀前葉に位置付けられる2基の須恵器窯を発見し調査しました。衣原古窯群の発見とともに、志太地域北東部において古墳時代後期の窯跡が存在することを示す貴重な成果となりました。



衣原 1 号窯



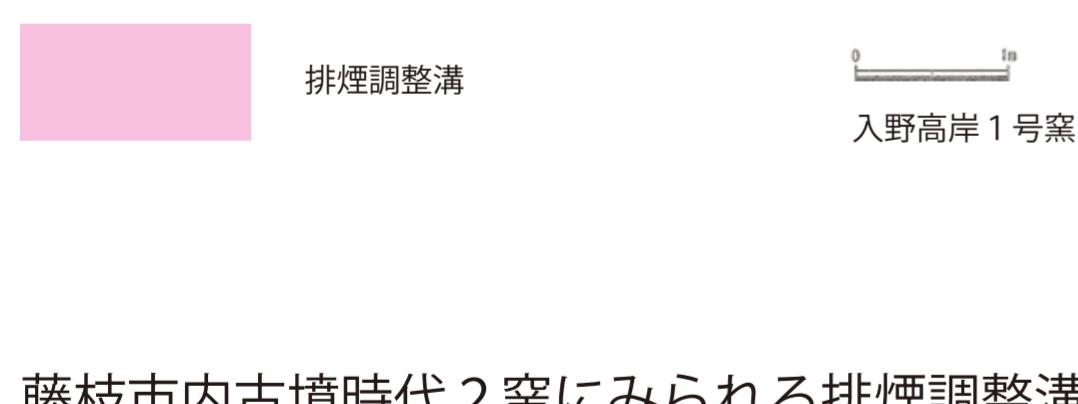
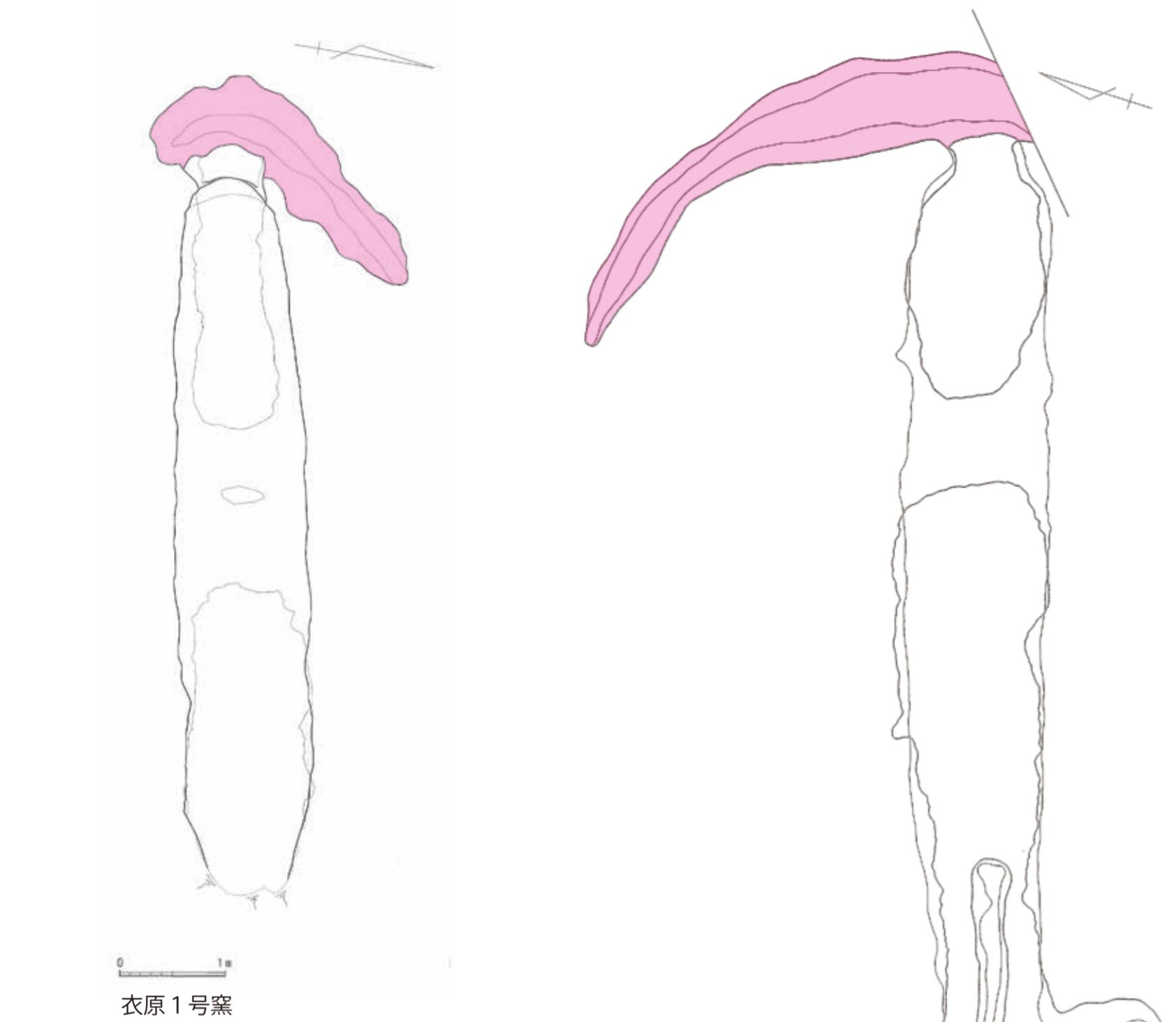
入野高岸1・2号窯

珍しい構造の窯

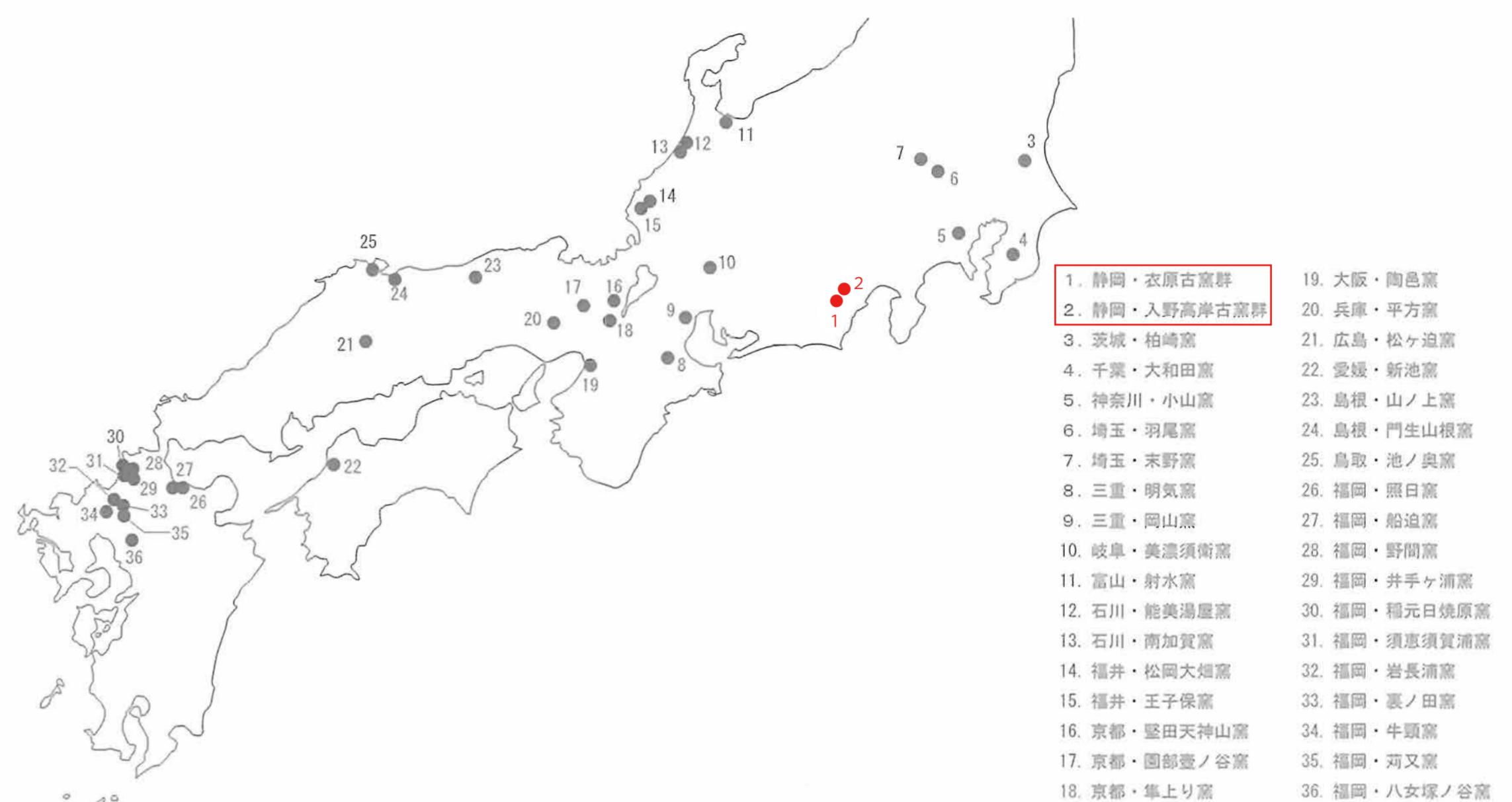
2.6km ほどの距離にある衣原、入野高岸両窯は、時期は異なるものの、窯の構造に共通点があることが明らかになりました。

窯尻（窯の先端部）に排煙調整溝と呼ぶ湾曲した溝が付けられており、この設備は、県内では衣原 1 号窯と入野高岸 1 号窯の 2 例だけに認められるものです（入野高岸 2 号窯の構造は不明）。

東海地方は、近畿・瀬戸内地域と並んで須恵器生産の先進地域のひとつですが、このような特徴を持つ窯は非常に珍しく、北九州、山陰、北陸に多く、一部は関東、東北に分布していることが分かっています。その共通点として、単独か 2 基並列して築かれること、古くからの大きな窯場ではなく、新規に開発される窯場に設けられること、製品の置き台として礫^{れき}を使う例が多いことなどが分かっています。この地の人々が前述の地域の人々との交流があったことを示す例と言えます。



藤枝市内古墳時代2窯にみられる排煙調整溝



排煙調整溝を持つ窯の分布

排煙調整溝を持つ窯の特徴

- 1 単独か2基並列して築かれること
- 2 古くからの大きな窯場ではなく、新規に開発される窯場に設けられること
- 3 製品の置き台として礫を使う例が多いこと
- 4 北九州、山陰、北陸に多く、一部は関東、東北に分布していること

奈良・平安時代の窯

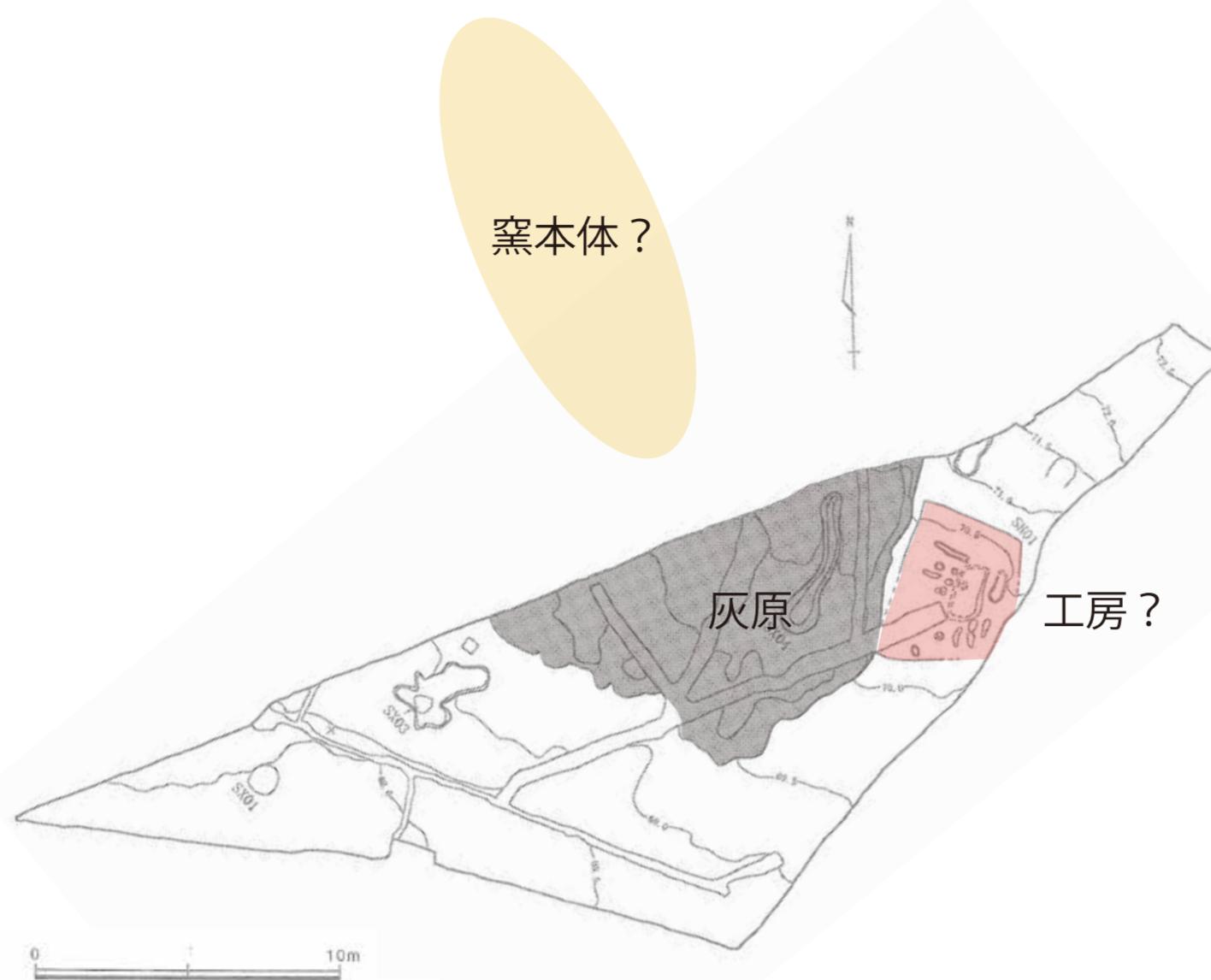
助宗古窯群

奈良～平安時代に須恵器、灰釉陶器、山茶碗を生産した古窯群です。助宗一帯には 100 基以上の窯跡があると考えられています。

助宗古窯群（清水下地区）

新東名寺島トンネル東付近の発掘調査では奈良時代～平安時代の窯に伴う灰原（窯の前面に広がる破損品や燃料の残りなどが堆積した場所）が検出されました。隣接して工房の可能性がある建物跡が検出されています。

清水下地区で生産された須恵器は、志太郡衙（市内南駿河台・御子ヶ谷遺跡）や安倍郡衙（静岡市・内荒遺跡）に供給された可能性が高いと考えられているほか、古代の役所や寺院で出土することが多い獸足壺や瓦塔も出土しています。



助宗古窯群（清水下地区）調査区全体図



工房と推測される建物跡



土器出土状況

鎌倉時代の窯

【参考資料】島田市すやん沢古窯跡

大井川の西岸に位置する島田市すやん沢古窯跡では、鎌倉時代前期（13世紀前葉）の窯が調査されています。平安時代末から室町時代にかけて東海地方で生産された山茶碗と呼ばれる無釉の陶器が焼かれています。燃焼室と焼成室の境の中央に設けられた直径が50～70cmの円柱の分炎柱と呼ばれる施設を持つのがこの窯の特徴です。これにより熱効率を高め、燃焼室からの火炎を二手に分け、燃焼室に均等に広がるように工夫したと考えられています。

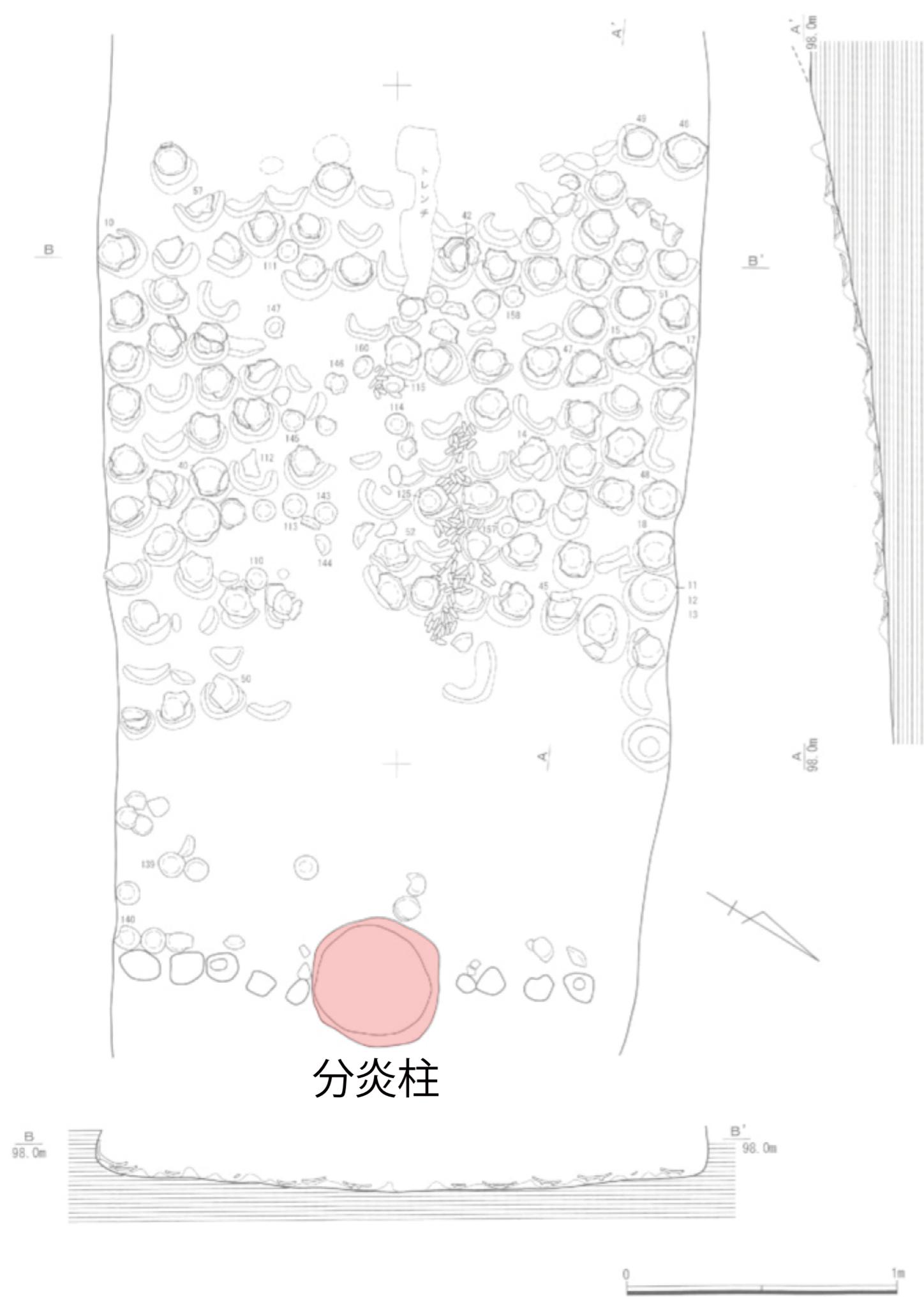
主な器種である碗は、奈良時代の壺と比べると丸みを帯びたものに様変わりしています。山皿と呼ばれる小皿は山茶碗とセットで使用された特徴的な形で、この頃のものは、高台（器の底に付く輪状の台）を持たないものです。いずれも日常雑器として大量生産されたもので、簡素な作りとなっています。



すやん沢9・10号窯全景



すやん沢9・10号窯拡大



製品が窯に融着しないよう、馬蹄形の焼台と碗の破損品を組み合わせた焼台の上に製品を重ねて置いたと考えられます。中央には陶錘が散乱しています。

徳川家康お墨付きの窯

【参考資料】島田市上志戸呂古窯かみしどろ

新東名建設に先立つ発掘調査で安土桃山時代の窯2基が調査されました。生産された陶器は丸皿・擂鉢などの生活雑器を中心に、天目茶碗・筒形碗・向付などの茶陶（茶の湯で使用する陶器のこと）を焼いていました。この窯は近世志戸呂焼につながる草創期の窯に位置付けられ、天正16年（1588）に徳川家康が朱印状を発給していることも注目されます。

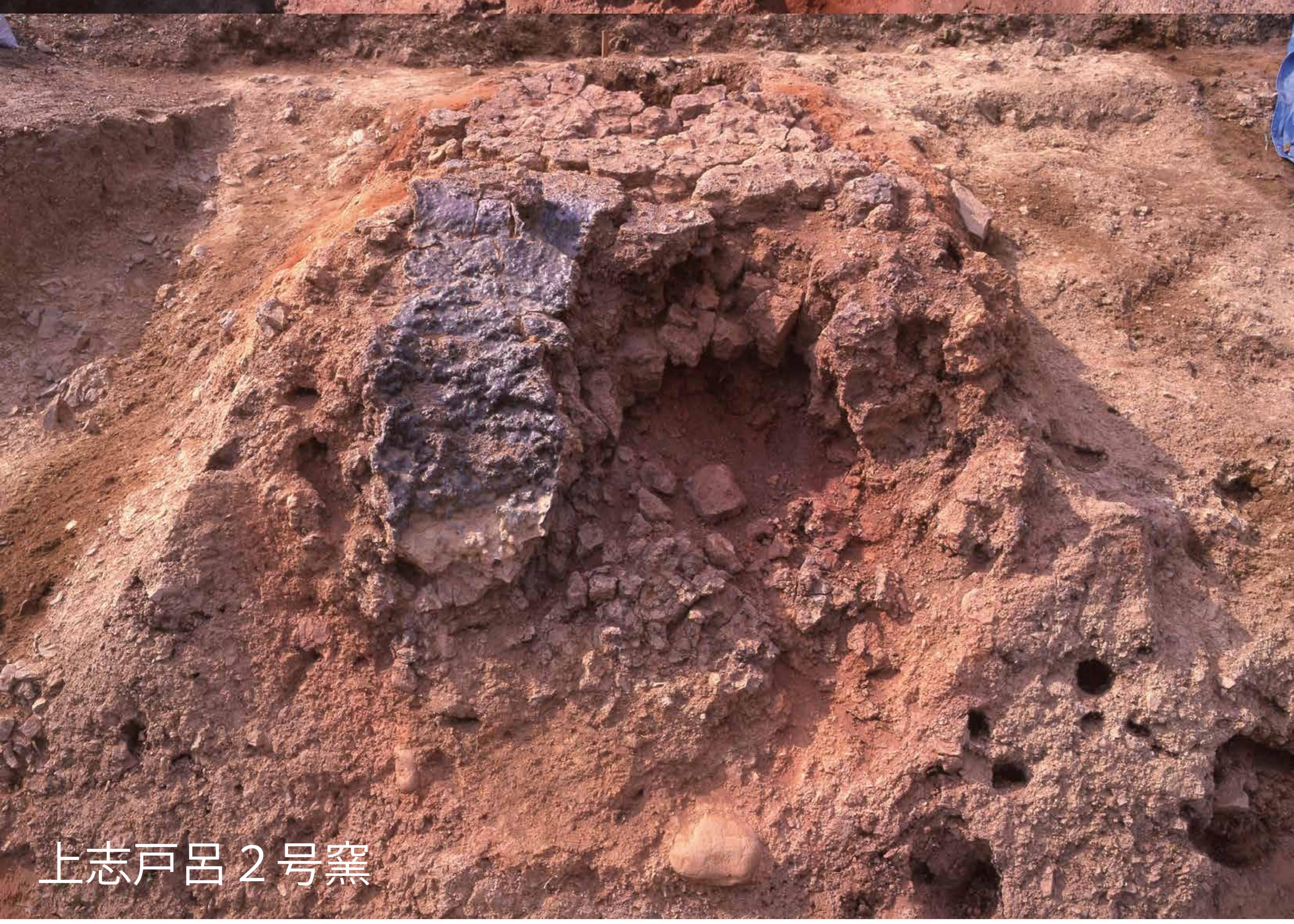
徳川家康朱印状（加藤文書）

遠州志都呂致在留瀬戸之者等、於御分国中、
焼物商売之役等、被成御免許之処、不可有相違候旨、
被 仰出候者也、仍如件、

天正十六 後五月十四日 浅井雁兵衛
瀬戸者等



上志戸呂 1号窯



上志戸呂 2号窯

助宗古窯群

昭和 52 年に御子ヶ谷遺跡（国史跡「志太郡衙跡」）が発掘されると、遺跡から瀬戸川を約 4 km さかのぼった助宗地域にある、奈良・平安時代の土器を焼いた窯跡群が注目を集めました。

瀬戸川の両岸と、その支流に沿った谷奥にかけて、約 100 基にのぼる窯跡が分布していることが把握され、清水下地区、細谷地区、鹿鳴渡地区、花倉地区、寺島地区の 5 つのエリアに分けて捉えられています。

清水下地区では、新東名高速道路に關わる調査のほか、農地造成に伴って、発掘調査を実施し奈良時代から平安時代にかけての、須恵器窯 4 基、灰釉陶器窯 1 基がみつかりました。まず、奈良時代に窯をつくり須恵器を焼き、何らかの理由で崩れて埋まった後、同じ場所で再構築され、さらにこれが廃絶して埋まった後、その上に平安時代の灰釉陶器を生産した窯がつくられる、というように時代を追って窯が変遷していく様子を捉えることができました。



助宗古窑群 清水下 Cc-4 号窑

田中城跡

戦国時代今川氏の命により整備されたとされる志太平野の中央に築かれた珍しい城です。周囲を低湿地に囲まれた地形を利用しており、攻めにくく守りが堅い城として知られています。また、微高地の周囲に堀や土塁を廻らせていったため、曲輪が同心円状になる珍しい縄張です。駿河西部を押さえる位置にあり戦国時代には、今川・武田・徳川の攻防の舞台となり、江戸時代初期には駿府に在城した徳川家康が、15回以上鷹狩りの際に訪れています。

江戸時代には田中藩が置かれ、明治維新で廃城になりました。本丸は明治時代に学校用地となり、現在は西益津小学校・中学校があります。これまでに本丸跡や二の丸跡の一部で発掘調査が行われ、石敷遺構や井戸遺構のほか土塁が長期間にわたって修築を繰り返された様子を確認しています。志戸呂や常滑、輸入陶磁などの陶磁器も出土しています。出土品は焼土とともにみつかっており、戦国時代の攻防で火を受けたものと考えられます。

田中城跡繩張図

